

沖縄は 海と空でできている



第5話 いつもの阿嘉島に戻る日～別れの時～

ジョージ・スギーニー
GEORGE SUGENEY

別れの日

2004年8月19日

阿嘉島に渡って4日目の朝。

一昨日沖縄を直撃した台風はちょうど阿嘉島の辺りで速度を落としたため、昨日も海上は大荒れとなり船は2日続けて全便欠航となった。

今朝は、窓の外から久々にセミの声が聞こえてくる。

その声に呼ばれるように外へ出てみた。

空を見上げると、真っ青な空が一面に広がっていた。

ようやく今日から船が動き始める。

3日ぶりだ。

我々は帰りの船のチケットを取るためターミナルへ行くと、切符売場には大勢の人が殺到していた。

この人達も台風の間この島に缶詰めになっていたのかと思うと、少し親近感が湧いてくる。

みんな島から出るに出られず、`やっとな軟禁状態から解放された、という笑みを浮かべている。

それは満面の笑みというよりは、安堵感による優しい笑顔だ。

これだけ人が殺到しては、おそらく午前中の船はチケットが無いだろう。

今更急いで帰っても仕方がないので、我々は夕方の高速船で本島へ戻る事にした。

一方阿嘉島で台風と一緒に過ごしたランさん達は、午前のチケットが取れたらしい。

一昨日はチャーター便を頼んでまで島を脱出しようとお互い東奔西走したが、結局は未遂に終わり、同じ志を持った戦友の様な友情を感じていた。

昨日までは海が荒れていたから泳ぐ事もできず、やれる事といえば三線を弾いてみんなで歌う事ぐらい。

あとはひたすら`ゆんたく、

そういえば、昨日は週に1日しか販売しない`阿嘉パン、の営業日だったので、一緒に訪れた。

残念ながら我々が着いた時にはパンは既に完売していたが、そこで`阿嘉人、と書かれたTシャツが売られているのを見つけた。

1枚2,500円。

服にお金をかけない私は、Tシャツに1,500円以上払ったことがない。

これはとても高級なTシャツだ。

しかし阿嘉ジョーグー(阿嘉好き)の私としては、押さえておきたい。

「うーん・・・バッティングセンター8ゲーム分かあ・・・」

そう考えたら、バッティングセンターの方が無駄に思えてきた。

結局、高級Tシャツを買った。

(12年経った今でも着ている。もう販売されていないらしいので、貴重なTシャツになった)

昨日宿の外に出たのはそれぐらいだ。

そういえば阿嘉パンへ向かう時、宿で仲良くなったユズ君も一緒だった。

ユズ君は東京の板橋から来ていて、東京生まれの東京育ちらしい。

彼は阿嘉パンへの移動中、ランさんに「なんでやねん」の発声をレクチャーされていた。

何回言ってもイントネーションが少し違うらしい。

ユズ 「なんでやねん なんでやねん なんでやねん」

ラン 「う～ん、なんか違うなあ。何が違うんやろ。ジョーさん言うてみて」

ジョー 「なんでやねん」

ラン 「ジョーさんはええなあ」

私は岐阜県生まれの愛知育ちで関西に近いせいか、「なんでやねん」が上手いらしい。

ユズ 「なんでやねん」

ラン 「ゝで、が違うな」

ユズ 「なんでやねん」

ラン 「うん、やっぱゝで、が低い。もうちょっと高くせんと」

ユズ 「なんでやねん」

ラン 「それはゝで、を大きい声にただけで高くなってへん」

ユズ 「なんでやねん」

ラン 「違うな」

こんなくだらない事がしばらく続くほど、我々は暇を持て余していて、あとは島酒を呑んでくれていた。

昨日はそんな退屈な一日を過ごし、今日は待ちに待った海日和だ。

我々は、ずっと泳げなかったうっぷんを晴らすために、ニシバマビーチへ向かう事にした。

朝食の片付けが終わったら、宿のお兄さんがビーチまで車で送ってくれるらしい。

となるとランさん達とはもうお別れなので、待っている間に部屋を訪ねた。

ゝコンコン、

「上杉です。僕らはこれからニシバマビーチへ行く事にしたんでお別れです。最後に挨拶しようと思って」

すぐにランさんが出てきた。

「ああ、ジョーさん。ホンマいろんな事あったけど、なんか楽しかったわあ。こんな事そうあらへんで。一生記憶に残るわあ」

「そうですね。一昨日みたいに1日に3回同じ人にお別れを言うなんてこと滅多にある事じゃありませんよ。結局お別れしてないですし。ハハハ」

「そうそう。また阿嘉島で会いたいなあ。今度は台風がおらん時に」

「そうですね。ビーチでは一緒に泳いでへんし。あれ、うつってきた、ハハ。今度一緒にスノーケリングしましょう」

「ええなあ。でも私シュノーケリング・・ん？スノーケリング？どっちが正解？」

「どっちでもいいみたいですけど、細かい事を言うとシュノーケリングは間違ってるらしいです」

「へー、何で？」

「シュノーケルってドイツ語らしいんですよ。でもドイツ語でingは無いらしいんで、シュノーケリングという言い方はしないらしいです。和製英語みたいなもんですかね」

「へー、なるほどな。で、私スノーケリングする時、スノーケル付けへんのや」

「えっ、じゃスノーケリングじゃないじゃないですか」

「せやなあ。しかも水泳用のゴーグルしてんねん」

「じゃ水泳ですね」

「うん。キャップも被ってるしな」

「えっ、完全に水泳ですね。でもキャップ要りますか？」

「潜った時に髪の毛がブアーなるから嫌やねん」

「海でキャップ被ってる人ってライフセーバーしか見た事ないですよ」

「うん、こないだ間違えられた」

「でしようね」

「フィンも付けてへんしな」

「まあ水泳用のゴーグルにキャップ被って足にフィンは逆におかしいですけどね」

「せやろ？別にフィンを買うお金が無い訳やないからな」

「分かってますよ」

やっぱりランさんは面白い人だ。

まだまだ話したいが、片付けが終わったお兄さんから呼びがかかってしまった。

「ランさん、じゃあ僕は行きますね。今度こそ船は出るみたいですから本当にお別れですね」

「うん、ありがと。元気で」

「はい。順子さんもお元気で」

「うん、ありがとう。ジョーさん達も気付けて帰ってな」

「はい、ありがとうございます」

少し後ろ髪を引かれながら、ニシバマ行きの車に乗った。

車の中でお兄さんが

「今年は台風が本当に多いですよ。おかげで水不足の心配はありませんけどね。でもちょっと来すぎかな」と話している。

島に住む人にとって水はとても貴重だ。

雨が何日も降らないと断水や制限がかかる事も珍しい事ではない。

ここでは台風は必ずしも招かれざる客ではないようだ。

車で3分も揺られるとニシバマビーチに着いた。

沖縄へ来て4日目にしてやっと海で泳げる。

そもそもこの天然水族館を親父に見せたくて来る事を決めたのに、台風のせいで見せずに帰るところだった。

一昨日フェリーが欠航になって逆に良かったのかもしれない。

ところで親父は泳ぐ事ができるのだろうか。

脳梗塞の後遺症は殆ど無くなっているようだが...

と、少し心配していたが、全く要らない心配だった。

60m位沖の方まで難なく泳いでいった。

沖の方で立ち泳ぎをしながら親父と話した。

「親父まだ泳げるねえ」

「当たり前だろ、全然問題ないわ。それにしてもここは凄いなあ。想像以上だわ。お前が1年に何回もここへ来るのも分かるなあ」

そう言ってまた泳ぎ始めた。

20分位泳いだらうか。

少し疲れたらしく、一度浜に上がる事にした。

波打ち際まで戻ってくると、これから海に入ろうとしている小湊が砂浜に座り込んでフィンのストラップの長さを調整していた。

フィンを履いては脱いで長さを調整し、また履いては脱いでを何回も繰り返している。

「小湊、そんなに神経質にならなくても大丈夫だぞ」

「途中で脱げたらどうするんですか」

「また履けばいいだろ」

「海底に落ちたら拾いに行けませんよ」

そういえば小湊は泳ぎが苦手だった。

以前私の実家の家族と伊豆に行った時、小湊は甥っ子の浮輪を取り上げて泳いでいたのを思い出した。

コイツにとってフィンは大事な命綱なんだ。

気の済むまでフィンの調整をしてくれ。

すると突然辺りが暗くなった。

「曇ってきたなあ、

そう思った瞬間、土砂降りの雨が降ってきた。

スコールだ。

スノーケリングに夢中だったからスコールの接近に気付かなかった。

「やばい、荷物にシートを被せないで水浸しになる。携帯電話が危ない」

私は荷物の所へダッシュで向かった。

荷物にシートを被せようとするが、風が強くてうまく被せる事ができない。

ひと足遅れて親父がやってきた。

二人でシートの端を持って荷物に被せ、飛んでいかないように押さえた。

「小湊は何をやっているんだ、と思い波打ち際へ目をやると、先程と同じ格好でフィンの調整をしている。

まるでスコールに気付いていないのかと思うぐらいフィンに集中している。

私は携帯電話が水没していないか早く確認したくて仕方がなかった。

今すぐにも携帯電話を取り出して確認したいが、このスコールでは出した瞬間に水没してしまう。

スコールがとても長く感じた。

私には10分位に感じたがおそらく5分位だろう、雨が止み辺りがまた明るくなった。

さっきの土砂降りが嘘のように快晴だ。

急いでバッグから携帯電話を取り出し、何のボタンか覚えていないが急いで押してみた。

点かない、画面は真っ暗だ。

他のボタンを押しても何の反応もない。

やられた。

この前機種変更したばかりなのに...

そうだ電源を入れてなかったのかもしれない。

今度は電源ボタンを長押ししてみた...

やっぱり点かない...

一度放して10秒数えてからもう一度長押ししてみた...

やっぱり点かなかった...

スコールにやられてしまった。

はあ...

快晴だったから雨の予測は全くしていなかったが、ここは沖縄だ。

スコールが来る事も考えておかなければいけなかった。

溜め息を吐きながら波打ち際に目をやると、先程と全く同じ格好でフィンの調整をしている小湊がいた。

「静止画か？、

一瞬そう思うほど体勢が変わっていなかった。

彼はこの一連のドタバタ騒ぎを全く知る由もなく、フィンに夢中なのである。

ところで彼の携帯電話は無事なのか？

「おい小湊、お前の携帯大丈夫か？俺のは今のスコールで水没したぞ」

「え、マジですか」

そう言ってフィンを片手に走ってきた。

バッグから携帯電話を取りし、

「大丈夫かなあ.....。あ、大丈夫でした。もう、びっくりさせないで下さいよお」

う〜ん...俺はこいつの携帯電話を守るために必死になっていたのか。

そう思うとだんだん腹が立ってきた。

もう一度スコールが来るようにお祈りした。

あ、

「小湊、今何時だ？」

「今9:50です」

今港へ行けばランさん達の出航に間に合う。

「小湊、ランさん達の見送りに行くか」

「えー、何時に出るんですか？」

「10:20出航だから30分後。今向かえば間に合う。親父は待ってて、小湊と歩いて港まで行ってくるから」

「えー行くんですか？」

「じゃいいよ、俺一人で行ってくるから」

「行きますよお」

もう少しすなりと事が進まないものか、コイツは。

急いでウェットスーツから阿嘉人Tシャツに着替えて港へ向かった。

港に着くと、これから船に乗る人と見送りの人でごった返していた。

「小湊、ランさんと順子さん探せ」

「いやあ、この中から探すの大変ですよお」

「文句ばっか言っていないで真剣に探せ。見つける前に船が出ちゃうぞ」

「そんな事言われても、あ、居た」

要はやる気の問題だ。

見つける気になって探せば見つかるもんだ。

私はランさんに向かって叫んだ。

「ランさーん」

ランさんはすぐに我々に気付いた。

ラン 「ジョーさんと小湊さん。見送りに来てくれたん？」

ジョー 「そうです。ニシバマから歩いてきましたよ。若干小走りで」

ラン 「さっき電話したんやで？ 電源切れてますう、言うと思ったけど」

ジョー 「ホントにそんな言い方でした？ 実はさっきのスコールで水没しました」

ラン 「ホンマ？ 電源入らへんの？」

ジョー 「はい、完全にアウトでした」

ラン 「それじゃ繋がらんはずや。しかしこの人ごみの中からよう見付けたなあ」

ジョー 「3日ぶりの出航だから人の数がすごいですね。あと見送りの人と帰る人の別れを惜しんでる様子が、いつもとちょっと違いますね。なんていうか、ドラマの最終回ですね」

ラン 「せやなあ。私達もいろいろあったけど、他の人たちもいろいろあったんやろなあ」

ジョー 「ですね」

先ほどから順子さんが無口だ。

ふと順子さんに視線を移すと、目が少し赤くなっていた。

二人と出会ったのはちょうど2日前の今頃だ。

二人は2日前のこの船（1便目）が欠航になり、宿へ戻ってきて我々と出会った。

初めは暇つぶし程度に三線を弾いてゆんたくをしていたが、その後我々は船をチャーターし、ランさん達はセスナを2度チャーターしたが、どちらも島を脱出することができなかった。

そのお陰で何度もお別れの言葉を掛け合ってきたが、今度こそ本当に別れの時だと再認識したのだろう。

知り合った時は、別れ際に目を赤くする仲になるとは思ってもいなかった。

船から降りる人が終わり、今度は島を出る人達が乗り始めた。

ジョー 「ところでランさんと順子さん、本当は何歳なんですか？」

ラン 「ハハハ、まだ気になっとった？おもろいから謎にしとこ」

ジョー 「東京に遊びに来ることは無いんですか？」

ラン 「滅多に行くことはないなあ。あ、妹が来月行く言うとった」

ジョー 「え、妹が居るんですか？」

ラン 「意外かあ？よう言われる」

ジョー 「じゃあ妹さんに東京へ来たら飲もうって伝えといてください。新宿三丁目の`どん底、っていう飲み屋に居ますから」

ラン 「どん底？凄い名前の中で働いとるなあ」

ジョー 「いえ、働いてるんじゃないんです。客で行ってるんです」

ラン 「そうなんや。この曜日なら必ず居るって曜日はあるの？」

ジョー 「そういう曜日は特に無いんですけど・・・週6日で行ってるので行けばだいたい居ます」

ラン 「週6？従業員やん」

ジョー 「29日連続で通った時もあったんで週7って月もありました」

ラン 「従業員超えたわ。オーナーやわ」

ジョー 「この前そこのオーナーに`住民票（うちへ）変えた方がいいんじゃないか、って言われましたよ」

ラン 「それだけ通ってたら言われそうやなあ。ちょっと私も行ってみたいくなったわ、その店」

ジョー 「是非来てください」

ぞくぞくと船に人が乗り込み、乗船する人があと僅かとなった。

それを見たランさんが、

「じゃあそろそろ行くわあ。乗り遅れたらシャレにならんしなあ。ハハハ」

そう言って二人は大きなスーツケースを転がして船の乗り口へ向かった。

その途中、何度もこちらを振り返って手を振っていた。

船の中に入り、しばらくして上の甲板に出てきた。

二人は我々に向かって両手を大きく振っている。

我々も両手を高く上げて振った。

その時、順子さんの目から大粒の涙がこぼれた。

それを見たランさんが笑いながら、`何泣いてんねん、みたいな感じで右手で順子さんの左肩を叩いた。

ランさんは笑っているが、ランさんの目も少し赤くなっているのが分かった。

それを見て私の目頭も少し熱くなった。

隣の小湊を見たら、目が真っ赤っかだ。

さっきから無口だと思っていたが、堪えるので必死のようだ。

船の乗船口が閉まった。

エンジン音が大きくなり、ゆっくりと動き始めた。

甲板の二人の手が更に大きな弧を描いた。

ランさんがこちらに向かって何か叫んでいるが、エンジン音でよく聞こえない。

私は右手を耳にあてて、「え？」という口をした。

するとランさんは更に大きな声で

「ジョーさん、今度会ったら・・・」

`ボーーーッ、ボーーーッ、

船の汽笛でかき消された。

なんて言ったんだろう。

どんどん二人は小さくなっていった。

電話をしようと即座にポケットに手をつっ込み、携帯電話を取り出したところで水没した事を思い出した。

もう一度二人を見た。

ランさんがうなずきながら手を振っている。

船が進む先に堤防の先端が見えた。

あそこに行けば声が届くかもしれない。

そこへ向かって思いっきりダッシュした。

「間に合え、

心で叫びながらとにかく走った。

途中何度か足がもつれた。

完全に運動不足だ。

それを甲板で見ている二人は手を振るスピードが上がった。

堤防の先端が近くなるにつれ、船がまた近くなってきた。

「ランさーん、何て言ったのーー」

走りながら叫んだ。

でもランさんは手を耳にあてて聞き返してきた。

もう一度叫んだ。

「な・ん・て・言っ・た・のーー」

ランさんは更に前のめりになって耳をこちらに向けた。

走るスピードを上げ、堤防の最先端を目指した。

そしてやっと先端に着いた。

しかし、船は先端を既に通過し、二人はまた小さくなっていった。

私は息を切らしながら右手を高く上げて叫んだ。

「ありがとーー」

二人の振る手がまた速くなったのが分かった。

どんどん小さくなっていき、米粒ぐらいになってしまったが、二人とも甲板で手を振っているのが分かった。

そして二人を乗せた船は、水平線のずっと奥に消えていった。

行ってしまった...

最後になんて言ったんだろう...

こんな時に限って携帯電話が水没しているとは...

私は夕方の船で那覇へ戻り、那覇市内のドコモショップへ行ったら水没した事を伝えたら、意外な答えが返ってきた。

携帯電話のカバーを外して確認したが、水没はしていないという。

単なる電池切れだそうだ。

そういえば昨日は飲み過ぎていつお開きになったのかも覚えていない。

携帯電話を充電した記憶もない。

そうか...電池切れだったのか...

あの時携帯電話が使えていたら...と一瞬思ったが、電池切れで良かったのかもしれない。

甲板からの声が聞こえないからといって、電話越しに言葉を聞くななんて無粋だ。

そんな風に思った。

ドコモショップで充電してもらおうと携帯電話はすぐに復活した。

早速ランさんに連絡を取って「あの時なんて言ったの？」なんて聞くのも、それこそ野暮な話だ。

これはこのまま心にしまっておく事にしよう。

那覇の宿へ向かうタクシーの中、窓からオレンジ色の光が差し込んできた。

無意識にその光の方へ顔を向けると、海に夕陽が落ちようとしていた。

夕陽の下には、先ほどまで居た慶良間諸島が薄っすらと見える。

それを見ていたら、この4日間の出来事が走馬灯の様に蘇ってきた。

台風に振り回された旅だったが、いろんな意味で良い旅だった。

昨年、親父が脳梗塞で倒れて、あと何回も一緒に旅行へ行けないだろうと思い、せめて生きているうちに阿嘉島のニシバマビーチを見せたくて今回訪れた。

実は親父が泳ぐ姿を見るのは、今回が最後となった。

そう言ってしまうともう他界してしまったのかと思われそうだが、実は12年経った現在もピンピンしている。

何も慌てて今回来ることもなかったのかもしれない。

でも今回のエピソードを思うと、決して無駄ではなかったと思うのだ。

やっぱり沖縄は、私にエネルギーを与えてくれる。

海も空も人も...

明日国際通りに三線を買に行こう。

《完》

沖縄は海と空で出来ている 【第5話】 いつもの阿嘉島に戻る日

<http://p.booklog.jp/book/101271>

著者：ジョージ・スギーニー

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/george5/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101271>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101271>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ